

わがいやあし病気のはなしシリーズ32

パーキンソン病



一般社団法人 日本臨床内科医会



患者さんのために

Fujimoto 藤本製薬グループ

【お問い合わせ先】

大阪府松原市西大塚1丁目3番40号

藤本製薬株式会社

TEL : 072-332-5151(代)

URL : <http://www.fujimoto-pharm.co.jp/>

エフピー株式会社

TEL : 072-332-5155(代)

URL : <http://www.fp-pharm.co.jp/>

平成 29 年 5 月作成

医院名

もくじ

はじめに	1
治療のスタートラインは、病気を正しく知ること 脳の細胞の一部だけが減ってしまう	2
おもな症状と病気の進行過程	4
筋肉や自律神経の働きが乱れてくる 症状はゆっくり少しずつ、時間をかけて進む	6
治療について	7
飲み薬による治療	
患者さんの症状や年齢などを考慮し薬を選択	9
おもな副作用と悪性症候群について	9
リハビリテーション	10
手術による治療	11
病気とともに生きる ～日常生活の工夫と注意～	12

わかりやすい病気のはなしシリーズ32

パーキンソン病

第8版第1刷
2019年11月発行

発行：一般社団法人日本臨床内科医会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-5 東京都医師会館4階

TEL.03-3259-6111 FAX.03-3259-6155

編集：一般社団法人日本臨床内科医会 学術部

後援：エフピー株式会社

〒580-0011 大阪府松原市西大塚1-3-40

TEL.072-332-5155(代表)

FAX.072-332-5222(医薬学術部)

はじめに

パーキンソン病と
診断された
患者さんやご家族へ

治療のスタートライン
は、病気を正しく知
ること

パーキンソン病と診断されたとき、患者さんやご家族はみなさん少なからずショックを受けるようです。パーキンソン病はいまだ“不治の難病”のように思われていますので、当然かもしれません。

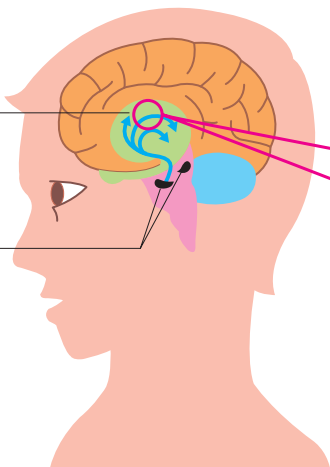
しかし、医学は日々進歩していて、そのようなイメージは過去のもので、病気そのものを治すことはできませんが、症状をコントロールし、長年、自立した生活を送ることができるようになっていきます。

このように治療が進歩しましたので、病気を悲観的にとらえず、正しく知ることが大切です。それによって、病気とともに生きる気構え、治療への意欲が生まれることと思います。



線条体
ドーパミンが
使われる所

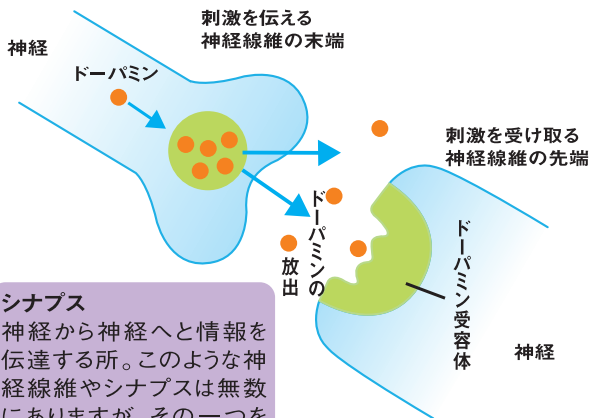
黒質
ドーパミンを
作る所



脳の細胞の一部だけが減ってしまう

それでは病気の説明です。パーキンソン病は脳の中にある「黒質」という部分の細胞が減ってしまう病気です。黒質はからだの運動を円滑に行うために必要な「ドーパミン」という神経伝達物質（脳の中で情報のやり取りをしている物質）を作る所です。

だれでも年とともに黒質の細胞が減ってきて、それは一種の老化現象と言えます。しかしパーキンソン病では、その減り方が早くなってしまうのです。脳のほかの部分（例えば物事を考えるところなど）は大丈夫なのに、なぜ黒質の細胞だけが減少するのかは、まだはっきりわかっていません。



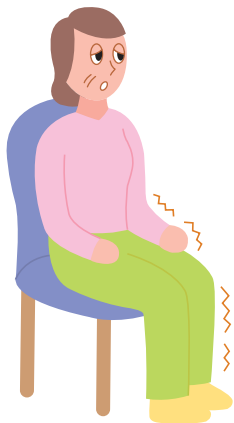
シナプス

神経から神経へと情報を伝達する所。このような神経線維やシナプスは無数にありますが、その一つを模式的に図解しました。

「食べてはいけないものは何ですか?」「やってはいけないことはありますか?」「仕事を辞めて治療に専念したほうがよいですか?」。診察室で患者さんに病名を伝えたあと、このような質問を受けることがあります。答えはいずれも「いいえ」です。パーキンソン病と診断されたからといって生活を変える必要はありません。‘病気のためにできないこと’を探そうとするより、‘病気があってもできること’をたくさん見つけてください。



おもな 症状と 病気の 進行過程



筋肉や自律神経の働き が乱れてくる

ドーパミンの量が不足すると、筋肉の動きをコントロールしにくくなって、次のような症状が現れます。

◆しんせん振戦

いわゆる‘ふるえ’のことで、しばしばこの振戦が発病に気付くきっかけになります。左右どちらかの手から始まり、同じ側の足、反対側の手・足の順に広がります。また顎がふるえることもあります。ふるえが起きる病気はいろいろありますが、パーキンソン病の場合、じっとしているときに強くなり、なにかの動作（例えば文字を書く、食事をするなど）をしているときには軽くなるという特徴があります。

◆きんきょうごう筋強剛

筋肉が固まったようになり、関節を動かしにくくなる症状です。指や手足、首の動かし方がぎこちなくなります。

◆^{む どう}無動

からだの動きが少なくなり、素早い動作をしにくくなります。歩幅が狭くなったり、声の抑揚や顔の表情が少なくなるのも、その症状です。

◆姿勢反射障害

姿勢反射とは、からだが傾きかけたとき瞬間的に筋肉を微妙に動かしてバランスをとる仕組みのことで、起きているときは無意識にこれを連続的に行って、転倒を防いでいます。パーキンソン病ではこの姿勢反射がスムーズに起こらず、よろけて倒れやすくなります。ときにはそれが骨折の原因になります。

また、歩き始めの最初の一步が出にくい「すくみ足」という症状や、いったん歩き始めると止まったり方向転換がしにくくなる「突進現象」などの歩行障害も起きてきます。

◆その他の症状

自律神経症状…便秘や立ちくらみ、排尿障害が起きやすく、また、脂っぽい汗をかきやすくなったり、よだれを垂らしやすくなります。

精神症状…抑うつ、意欲の低下、幻覚、妄想などが現れることもあります。

「パーキンソン症候群」という医学用語があります。パーキンソン病以外の理由で、パーキンソン病と同じような症状が現れる状態のことです。原因は、脳腫瘍や脳卒中などの病気、あるいはなにかの薬の副作用などです。

症状はゆっくり少しずつ、時間をかけて進む

パーキンソン病は進行性の病気で、医学的には症状ごとに以下のように分類されています。しかしそのスピードは遅く、時間をかけてゆっくり進みます。個人差もあり、重症度ⅠやⅡのまま進まない人もいます。なお、重症度Ⅲ以上かつ生活機能障害度Ⅱ(日常生活、通院に部分介助を必要とする状態)以上の場合は治療費の助成を受けられ、40歳以上なら介護保険も利用できます。

重症度Ⅰ…左右どちらかだけに振戦や筋強剛がある状態で、日常生活にはほとんど不自由ありません。

重症度Ⅱ…左右両側に症状があり無動も加わってくるものの、姿勢反射障害はありません。仕事にはやや支障を生じますが、自立した生活を送れます。

重症度Ⅲ…姿勢反射障害や歩行障害が加わり、生活のなかで部分的な介助が必要になります。仕事は職種や職場環境次第で続けることができます。

重症度Ⅳ…一人で歩くことが難しくなり、生活のさまざまな場面で介助が必要です。

重症度Ⅴ…一人では立つことができず、ベッドや車椅子での生活になります。全面的な介護が必要です。



治療について

飲み薬による治療

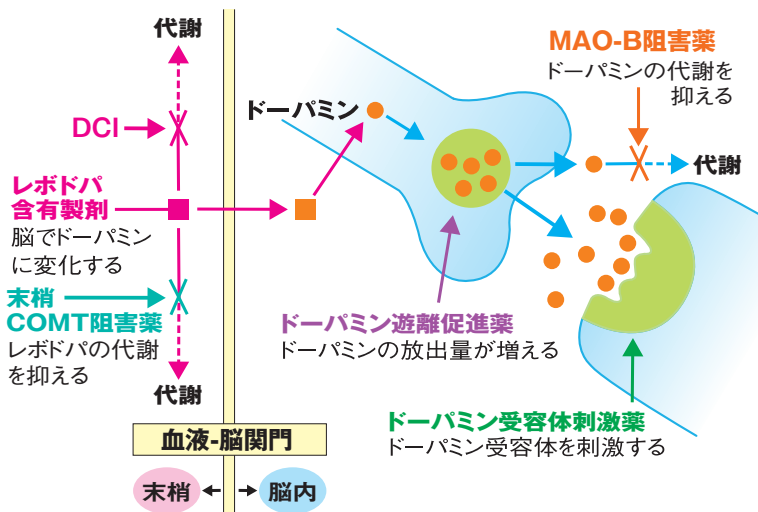
作用の異なる薬がいくつかあり、それぞれ症状のコントロールが期待できます。

レボドパ含有製剤…脳内のドーパミンが減ることがパーキンソン病の症状のおおもとですから、ドーパミンを脳

に入れてあげれば症状は改善します。この薬は体内に吸収されたあと血流に乗って脳に入って、ドーパミンに変換されます。なお通常は、レボドパ含有製剤が脳へ入りやすいように工夫された、DCI(ドーパ脱炭酸酵素阻害薬)を混ぜた配合剤が使われます。

ドーパミン受容体刺激薬…受容体とは、神経伝達物質であるドーパミンを受け取る(受容する)部分のことです。この薬は受容体に直接結合し、刺激します。

酵素阻害薬…ドーパミンは、それを放出(伝達)する側と受容体の間を行き来するうちに、いくつかの酵素の働きで代謝(分解)され、徐々に量が減っていきます。減った分を補充できなくなる病気がパーキンソン病なのですが、酵素の働きを阻害(抑制)すれば、ドーパミンが減りにくくなります。そのように作用する薬を酵素阻害薬といいます。酵素阻害薬のうち**MAO-B阻害薬**は、ドーパミンを代謝する酵素の働きを脳内で抑えて、ドーパミンの量を保ちます。**末梢COMT阻害薬**は、併用するレボドパ含有製剤を代謝する酵素の働きを末梢で抑え、レボドパ含有製剤の効果を助けます。



ドーパミン遊離促進薬…ドーパミンを放出する部分の働きを強め、ドーパミンの量を増やします。

抗コリン薬…ドーパミンが減ることで相対的に作用が高まる神経伝達物質「アセチルコリン」の働きを抑える薬です。振戦の改善効果があると言われています。

ノルアドレナリン補充薬…神経伝達物質の一つ「ノルアドレナリン」を増やす薬で、すくみ足を改善します。

レボドパ代謝賦活薬…元はてんかんの薬で、ドーパミンの代謝・放出などを調節する作用があり、パーキンソン病にも使われます。

アデノシンA_{2A}受容体拮抗薬…ドーパミンの作用とは別の経路で働き、レボドパ含有製剤の効いている時間が短縮してしまう、ウェアリング・オフ現象という症状を改善します。

◆患者さんの症状や年齢などを考慮し薬を選択

これらの薬のなかで、総合的に一番効果があるのはレボドパ含有製剤です。しかしレボドパ含有製剤は長期間服用していると次第に効果が弱く不安定になったり、不随意運動や幻覚、吐き気などの副作用が出やすくなります。このため、長い期間治療を続けることが予想される50代、60代で発病した患者さんには、最初はまずできるだけレボドパ含有製剤の使用量を抑えてほかの薬で補うという考え方が主流です。

一方、高齢の方にはレボドパ含有製剤がよく処方されます。また患者さんが、からだを動かす仕事を続けたいと希望される場合なども同様です。

◆おもな副作用と悪性症候群について

パーキンソン病の薬は副作用で吐き気を起こすことがよくあります。ただしこれは最初の1カ月ぐらいで慣れることが多いようです。便秘もよく起こる副作用です。パーキンソン病による自律神経症状の影響もあります。なお、吐き気も便秘も薬で比較的よくなります。そのほか、脳で作用する薬なので、幻覚や妄想などが現れることがあり、その場合は薬の量を加減します。

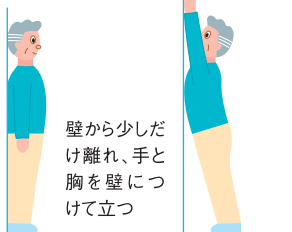
注意が必要なのは「悪性症候群」です。まれにしか起こりませんが、薬を急にやめたときや夏場の脱水時に起こります。発熱と痙攣がその症状です。このような症状が現れたら、すぐに救急車を呼んでください。なにより、薬の量を自己判断で変えないことが大切です。

家でもできるリハビリテーション

(詳しくは医療スタッフのアドバイスを受けてください)

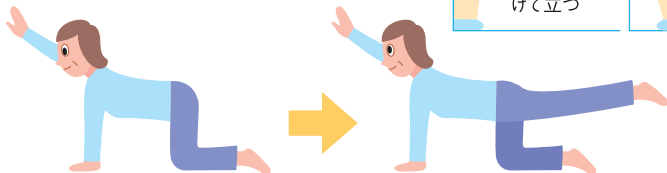
背筋を伸ばす

壁に背中をつ
けて立つ



壁から少しだ
け離れ、手と
胸を壁につ
けて立つ

バランスをとる



片手を上げた状態や反対側の片足も
あげた状態を保つ



上半身を左右へ
ゆらす

リハビリテーション

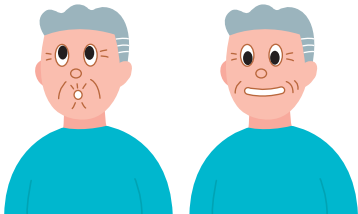
リハビリテーションというと、からだが動かなくなった状態から始めるものと思われがちですが、パーキンソン病の場合ではむしろそうなるのを防ぐために行います。薬による治療と同じくらい大切な治療法です。姿勢反射障害がある場合は、介助を受けながら行ってください。

その場足踏み



手足をなるべく大きく動かしながら足踏み

顔の表情を作る



ほおをすぼめたり、ふくらませたり、口や舌、目を動かす。大きな声を出す

リハビリテーションの効果

- 筋強剛などのために関節が固まって、本当に動けなくなってしまうのを防ぎます。
- 歩行障害をカバーし、生活の活動範囲を広げます。
- からだを動かさないため筋力がさらに低下するのを防ぎます。
- 骨を丈夫にして骨折を防ぎます。
- からだを動かすことで、ストレスが発散されます。
- これらの結果、健康寿命（自立生活を送れる期間）を延長できます。

手術による治療

薬ではコントロールが難しくなってきたときに、脳の中に電極を埋め込み、電流を流して刺激を与えるという手術治療があります。この手術で症状がとてもよくなる患者さんもあります。その反面、手術の後遺症が出てしまったり、効果がないケースもあります。手術を受けるかどうかは医師とよく相談して決めてください。

病気と ともに 生きる

日常生活の
工夫と注意

パーキンソン病がどのような病気か、おわかりいただけただけでしょうか？ この病気は中高齢者に多く、発病後は少しずつ不自由さが増えてきます。しかしそれを深刻に考えずに明るく生きるように努力しま

しょう。一日一日がよい日だったと思うようにしましょう。病気を十分理解したうえで、病気にとらわれ過ぎずに生活を送ることができれば、きっと充実した日々になると思います。最後にそのためのアドバイスをいくつかあげておきます。

★**転ばないように注意しましょう**…姿勢反射障害による転倒防止のため、屋内の床の段差をなくしたり、手摺すりをつけたり、室内の整理整頓を。外出時に杖を持つと、周囲の人への注意喚起の意味でも役立ちます。

★**薬は必ず指示どおりに飲んでください**…思わぬ副作用の予防のために、大事なことです。

★**水分を多めにとりましょう**…脱水は便秘の原因になり、悪性症候群を引き起こすこともあります。夏場はとくに注意してください。

★**公的な社会サービスを利用しましょう**…生活に不自由なことがでてきたら、

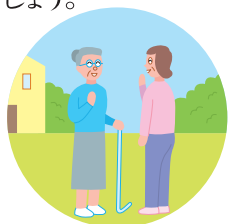


患者さんから「この病気は遺伝しますか?」とよく尋ねられます。20~30代の若い人に発病する若年性パーキンソン病という病気があり、これはまれに遺伝が関係していると考えられていますが、中高年になって発病するパーキンソン病は遺伝しません。

「アルツハイマー病とはどう違うのでしょうか?」。これも多い質問です。どちらも病気を初めて報告した外国人医師の名前が病名になっていて、似ている病気と思われがちですが、両者は全く別の病気です。アルツハイマー病は認知障害(痴呆)が進むのに対し、パーキンソン病は運動系の障害が進む病気で、認知障害が主症状ではありません。

本人や家族だけで解決しようとせず、介護保険など利用できることはなんでも利用しましょう。

★社会との接点をいろいろ作りましょう…病気だからと内にこもらず、どんどん人と会って話をしましょう。それが病気をもちながら生きていく活力を生みます。



患者さん同士の情報交換や、治療の向上を図る全国的な組織として「**全国パーキンソン病友の会**」があります。イベントを通じ人と積極的な交流、機関紙による最新情報の入手ができます。

◇入会方法などのお問合せは…

全国パーキンソン病友の会 本部事務局

〒165-0025 東京都中野区沼袋4-31-12

矢野エメラルドマンション306号

TEL 03-6257-3994 FAX 03-6257-3995

ホームページ <https://jpda-net.org>